

## 著者コメント

谷 隆 一 郎

この度「既刊出版物部会」という新しい試みが催されたが、司会者をはじめ、御意見をお寄せ下さった方々、そして当日参加し見守って下さった多くの方々に、改めて心から感謝申し上げたい。頂いた御意見御批判に対してまともに応答してゆくには余りに紙数が限られているが、中心に触れることを少しばかり記して責めを塞ぐことにしたい。

拙著での解釈の基調として「存在論的ダイナミズム」という言葉を用いたが、それは決して単に個人の魂のうちに閉ざされた無世界的な運動ではなくて、却って人と人との真の交わり（広義のエクレシア）としてはじめて現出するものであった。脱自的な超越や自己否定のわざは、恐らくは同時的に世界・他者への還帰と甦りとして成立してくるのである。この点は拙著においても折々言及し、またとくに最終章の締めくくりの節において、「否定の契機、身体性の復権」、「神性の全一的交わり（エクレシア）」、「根拠たるキリストの発見」といった項目で少しく論じたところである。だが、それらは諸々の問題の収斂してゆく根源の位相を望見するに留まり、十分に主題的に扱われるには至っておらず、質問者の方々のそれぞれに炯眼な御批判は、内実としてはいずれもその点に関わってくるであろう。自覚して虚心に受けとめ、今後の歩みの資とも励みともさせて頂きたいと思う。

それとともにこのところ改めて強く感じさせられるのは、とりわけ東方西方の教父たちの哲学・神学的な探究の文脈が、その根底において恐らくは修道的文脈と密接に呼応し、そこから生命を得ているに違いないということである。彼らはいわば超越的の神性の働き・現存に限りなく己れを晒し、その無量の没我の裡に神の赦しと創造のわざを観想していったと考えられよう。そうした古来の師父たち、そして有名無名の修道者たちの言葉・生は、今日容易に凌駕しがたいもの、体現しがたいものであり、その点を想うとき、学問もどきの営みなど、もしそれだけが切り離されるならば、ほとんど取るに足らぬものだと言うほかはない。

ただそれにしても、彼らはやはり時と所とを超えて、声なき声でわれわれを一つの見えざる交わりへと呼びかけてくれているであろう。そうした靈的な交わりは、すべてのもの、すべてのことが過ぎゆき、真に同一に留まるものとなないこの世の道行き

にあって、われわれがかろうじて存在に、そして神に与り得る姿を指し示すものでもあろうか。そしてその可能根拠として、神の子キリストの受肉、ヒュポスタシスの結合という現実以上の現実が見出され語られ得たのではなからうか。とすれば、キリストの問題は、もしそれがいたずらに客観性を旨とする文脈や、あるいは逆に特殊なものとしての信仰をはじめから局外に前提するような文脈の中で言挙げされることなく、真に己れが蔑され無化されるような、より先なる使徒的経験のうちに問い披かれるときには、存在、知、善、自由、行為等々の最も根源的な位相に関わってくるのであり、それゆえにまた、普遍的な愛智 (= 哲学) にとって、本来回避してしまうことのできぬ中心の問題として甦ってくると思えられるのである。